

研究推進校事業報告書

<取組と成果のポイント>

年間6回の外部講師派遣を行い、教員の力量向上と意思統一をすることができた。これにより、教師が生徒を評価する際に共通の認識で評価を行い、また、教師自身が自分の授業を評価するサイクルが定着し、指導と評価の一体化に繋げることができた。また、他教科、他領域との連携の方法について、これまでの認識とは違い、普段の授業の中における少しの工夫で行うことができることを理解できた。これらのもとに、生徒は地域の活動の中で実際の行動として生かすことができるようになった。

1 研究推進校の概要

学 校 名	所 在 地	電 話 番 号	児 童 数	備 考
愛西市立立田中学校	愛西市石田町宮東1番地	0567-25-2661	189人	

本校は木曾川下流域の東部に位置し、豊かな田園地帯が広がる地域である。学区は南北に広く、北部と南部にある小学校2校の生徒が本校に入学する。今年度は、各学年2学級と特別支援学級が3学級で、合計189名の生徒数となっている。『個性を大切にし、知・徳・体の調和のとれた人間形成をめざす』を学校教育目標として、確かな学力を身につけ、豊かな人間性・社会性をもつ生徒の育成に努めてきた。特に、「自他の生命を尊重し、思いやりにあふれる生徒」「学びを進め、困難にあってもたくましく生き抜こうとする生徒」「笑顔で挨拶や返事ができ誰とでも協調して生活できる生徒」を重点目標としている。

2 研究主題とその設定の理由

(1) 研究主題

研究主題

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実
—道徳科の指導と評価の一体化—

(2) 主題設定の理由

本校では、令和3年度の現職教育の研究主題を「確かな学力を身につけ、学びに向かう力を高める生徒の育成」とし、授業研究に取り組み、授業実践を行ってきた。特に、言語活動の充実を図り、ペア学習やグループ学習等を通して、お互いの思いや考えを出し合い、議論する中で考えを深めていく学習活動の工夫に努め、教科に応じた思考力・判断力・表現力を養う授業の工夫を行ってきた。道徳については、自分ごととして考えることを大切にした道徳教育の充実を目標とし、授業に取り組んでいる。道徳の授業を核とし、豊かな人間性を育むとともに、命の大切さを学ぶ場も設定している。しかし、授業は担任の力量や学年の裁量に委ねられており、学校訪問で代表者が授業を公開する機会はあるものの、十分な研究協議をすることはできなかった。そのため今後は、指導したことが生徒にどのように響いているか、それをどのように評価するのかなどについて、共通理解を図りつつ、進めてい

く必要があると考える。

令和3年度全国学力・学習状況調査質問紙の結果から、「自分にはよいところがあると思いますか」「将来の夢や目標をもっていますか」の結果は全国・県の平均を下回っており、本校には、自分にあまり自信がもてなかったり、将来の見通しを立てられていなかったりする生徒たちが多いと感じる。一方、「新聞を読んでいますか」や「自分の思っていることをきちんと言葉で表すことができますか」「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」では、全国・県よりも高い結果となった。社会性が高く、周りとの意見を交換することに関心をもっている生徒たちが多いと考える。

これらのことから、道徳の授業改善に取り組み、地域の方との交流や関わり合いを通して、自分自身の住む地域についてより知見を広げるとともに、生き方や命にかかわる学びの場を設定し、生徒の自己肯定感の高まりへとつなげていきたいと考える。そこで、本年度は第一歩として、研究テーマを『特別の教科 道徳』を要とした道徳教育の充実 一道徳科の指導と評価の一体化」とし、外部講師を招いた計画的な研修等の実施を行うものとした。

3 研究の概要

(1) 研究の仮説

- ① 道徳の授業において、発問を工夫することで生徒に問題意識をもたせ、生徒が自分ごととして主体的に考えることにより、対話を通して自他の意見を比較検証し、道徳性の高まりと成長実感を得ることができるだろう。
- ② 道徳の授業と、他教科、他領域との関連を図り、継続的な指導と評価を行うことで、生徒が道徳的な判断力や実践意欲を高めることができるだろう。

(2) 研究の手立て

① 外部講師の派遣による授業改善

年間を通して外部講師を招き、他者と円滑にコミュニケーションをとる方法や、道徳の教材研究の方法および指導方法、適切な評価の仕方等について学び、専門的・論理的な視点での授業づくりや客観的な授業分析と取組の有効性を検証することで、教員の意識改革と授業力向上を図っていく。評価方法については、互いに授業を見合ったり、意見交換を行ったりすることで、授業改善を通して進めていく。道徳の授業実践の積み上げと評価方法については、外部講師の方に具体的な指導をしていただき、全ての教員が共通理解をしようとして進めていく。

② 教科横断的な道徳教育の実践

地域の特色を生かした道徳教育を推進するとともに、学校教育目標、道徳教育の推進計画、各教科・行事等との関連を明確にした道徳教育の全体計画、教科書等の教材を中心とした道徳科の年間指導計画を作成する。

総合的な学習の時間における地域の講師を招いての工業実習や、地域と連携して行うボランティア活動の体験等と道徳の時間を連携させ、道徳と各教科・行事等と横断的な学習を計画する。

また、命の授業において、地域の方々とふれあったり、命の連続性や大切さを学んだりするなど、活動の全てを実践の場とする。また、年間計画にある授業参観・学校公開日において道徳科の授業を実施し、家庭との共通理解を深め、連携を図っていく。

(3) 仮説に対する検証方法

- ① 事前・事後の意識調査（生徒・教員）、生活アンケート（生徒）、Q U検査等。
- ② 各授業の中で使用するワークシートから生徒個々の心の変容を検証する。

- ③ 学校行事後のまとめの作文。
- ④ 学級通信やP T A新聞、学校ホームページ等において活動の様子を伝える。
- ⑤ 学校アンケート

(4) 研究計画

月	実施内容	備考
4～5月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究計画と研究組織の策定 ・意識調査（県教委作成） ・道徳授業一斉公開（授業参観） 	全職員 生徒・全職員 生徒・保護者・全職員
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修 外部講師招聘 QU分析による教員個別指導 天野 吉繁 様 「QU検査の生かし方」 6月1日 ・校内研修および愛西市初任者研修公開授業 愛西市教育委員会 主幹 吉田 光男 様 道徳公開授業 平野 諒太 教諭 6月8日 ・校内研修 外部講師招聘 日本ペップトーク協会セミナーファシリテーター 鈴木 孝 様 講演「ペップトーク」 6月17日 	全職員 全職員 全職員・愛西市初任者
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート実施（校内作成） ・校内研修 外部講師招聘 元東浦町立片葩小学校長 授業アドバイザー 中村 浩二 様 道徳公開授業 鳥居 新 教諭 研究協議会 7月11日 	生徒・保護者・全職員 全職員
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修 外部講師招聘 岐阜聖徳学園大学准教授 山田 貞二 様 講演「うれしい、楽しい、道徳大好き」 ～自己の成長を実感できる評価とは～ 8月1日 	全職員
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修 外部講師招聘 元東浦町立片葩小学校長 授業アドバイザー 中村 浩二 様 道徳公開授業 水谷 行宏 教諭 講演「道徳科の授業づくりと道徳授業の評価法」 11月7日 	全職員
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート実施（校内作成） 	生徒・保護者・全職員
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・意識調査（県教委作成） 	生徒・全職員

4 これまでの取組

(1) 授業実践

① 3年生の実践

【主 題】 明るく生きる (A (1) 自主、自律、自由と責任)

【教 材】 「手品師」 (中学道徳③ きみがいちばんひかるとき)

【ねらい】 「長年の夢」か「たった一人の男の子との約束」かで迷う手品師の立場を自分ごととして考えることを通して、自分の心に正直になることや、相手のことを考えることの大切さに気付き、誠実で責任ある行動をとろうとする実践意欲と態度を育てる。

本資料は、腕はいいが、あまり売れない手品師が主人公である。彼は、大劇場のステージに立つことを夢見て、日々、腕を磨いている。ある日、お父さんを亡くし、しょんぼりする男の子に出会う。手品師は、男の子を元気付けようと、手品を披露した。これにより男の子は明るさを取り戻す。そして、次の日も手品を見せることを約束する。その夜、手品師は仲のよい友人からの電話で、大劇場に出られるチャンスがあることを知らされる。手品師は、長年の夢である大劇場に出ることを選ぶのか、たった一人の男の子との約束を守るのかで迷う。この場面で「自分が主人公の立場だったら、長年の夢だった大劇場に行くか、たった一人の男の子との約束を守るか」という発問を行った。これにより、生徒は「自分が主人公だったら」という前提で自分ごととして考えることができた。

この授業における発問の工夫は、主発問だけでなく、補助発問にも重点をおいた。道徳における葛藤場面では、モラルジレンマによるどれか一つの選択という場面が多い。しかし、実生活の中ではどちらも選ぶことができない。あるいは選びたくないという場合も数多くある。そのような時にどう判断をするのかも道徳的価値の一つだと考え「この二択より素敵な方法はないだろうか」という補助発問を行った。ここまで、「どちらかを選択しなければいけない」という前提で考えていた生徒にとっては、視野が広がり「自分とは異なる立場だが、尊重したい意見」を自然と取り入れようとする発問となった。

② 1年生の実践

【主 題】 自分の行動に責任をもつとはどういうことだろう。(A (1) 自主、自律、自由と責任)

【教 材】 裏庭での出来事 (中学道徳① きみがいちばんひかるとき)

【ねらい】 本当のことを言うことができなかつた健の立場に立ち、自分が健だったら先生に何を話すかを考える活動を通して、自分の行動に責任をもとうとする態度を育てる。

本資料は、主人公の友達である雄一が、ネコに襲われそうな鳥のヒナを助けるためにボールを投げて学校のガラスを割ってしまうところから始まる。雄一はそれを先生に報告に行くが、その間に主人公と大輔がサッカーをしていたところ、主人公が蹴ったボールがガラスにあたり、さらに一枚ガラスを割ってしまう。しかし、雄一が現場に先生を連れてきたときに、大輔は二枚とも雄一が割ったことにする。雄一の行動が善意によるものだったため、誰も咎められることはなかったが、主人公は本当にこれでよかったのか悩み、最後には職員室に向かうという内容である。

本資料で中心となるのは、主人公が先生に何を話すのかを考える場面である。主発問では「あなたが健だったら職員室に行って先生に何を話すか」とした。この発問により生徒は、自分が割ったことだけを話すか、大輔に誘われたことも含めて話すかで迷うことになる。大輔のことを伏せて話せば、自分だけで責任をとった形となる。大輔のことを併せて話せば、責任を分散させたような形となる。一見すると前者のほうが正しい行動のようにも感じられ、話し合いをしていく中でそちらの意見に多くの生徒が傾いた。しかし、ここで教師から補助発問として、「大輔のことを伏せるのは、大輔のためとなるのか」「大人が同じことをしたら許されるのか」という発問をした。これにより、生徒の考えをゆさぶり、よ

り深く自分の行動に責任をもつとはどういうことかを考えさせた。

また、この授業では、普段なかなか自分の考えがもてない生徒でも、全員が自分の考えをもつことができるように、話す内容を以下の中から選ぶという形で行った。

ア 一枚目を割ったのは雄一君です。

イ 二枚目を割ったのは自分です。

ウ 二枚目を割ったのは自分と大輔君です。

エ 二枚目を割ったのは大輔君に誘われてサッカーをしていた自分です。

オ 先生が来たとき本当のことを言えなかったのは、大輔君がうそつきになると思ったからです。

カ 先生が来たとき本当のことを言えなかったのは、黙っていれば怒られないと思ったからです。

キ 先生が来る時、雄一君が二枚割ったことにしようとして大輔君に提案したのは僕です。

発問を工夫するとともに、それに対して生徒が考え易くすることで、その後のグループでの話し合いを活発にすることができた。

一方で、本授業は講師の先生にも参観していただき、ご指導いただいたが、この授業において、話し合いを活発にするもう一つ的手段として、「グループで意見を一つにまとめましょう」という形態にした。しかし、この形態は話し合いを活発にすることはできたが、生徒にとっては、自分の考えを無理に変えなければいけないという形になってしまい、自分ごととして捉えることができなくなる。というご指摘をいただいた。教科の授業では、考えや意見を交流させるために「グループで意見を一つにする」という形態は有効であるが、道徳においては自分の考えではなくなってしまうため、有効ではないということであった。

(2) 外部講師の指導による教員の力量向上

年間5回に渡り、外部講師を招いて教員向けの指導をしていただいた。内1回はQ Uアンケートをもとにした学級経営の方法についてご指導をいただいた。これは、それぞれの学級がどのような特性をもっているかを、アンケートをもとに客観的なデータとして見ることができた。また、クラスの特性だけでなく、生徒個々がどのような特性なのかも知ることができるため、その後の学級経営に生かすことができた。

① 授業をもとにした研究協議1 (7月11日 講師 中村浩二先生 授業アドバイザー)

本研修においては、研究授業をもとに、実際の授業を講師の先生に参観していただいた。授業者、あるいはその他の教師が、日頃道徳の授業を行う中で困っていること、悩んでいることについて、項目ごとにご指導をいただいた。中心となった項目は以下の3点である。

【道徳の授業における板書について】

- ・ 道徳の板書には二通りある。一つは時系列、もう一つは構造化。
- ・ 生徒の思考に役立つものを板書する。生徒の意見全てを書こうとしない。
- ・ 構造化の板書は難しい。経験が必要。登場人物の関係を構造化する。生徒の考えを構造化するなどがある。

【道徳の授業における終わり方について】

- ・ 道徳に効果的な終わり方はない。終わりに期待をしない方がいい。授業の最後の場面で道徳性を高めようとする教師の意図が見える場合があるが、そのような期待をしてはいけない。深く考えて、振り返ればそれでいい。

- ・ 一般化発問により、自分の生活レベルや、実生活の中での自分の姿を思い浮かべて考えさせるという終わり方があるが、これは絶対に必要というものではない。資料をもとに考え、感じたことを感想に書かせるだけで終わっても問題はない。また、教師の説話等を取り入れる場合があるが、これも注意して行う必要がある。教師の説話は場合によっては「こう考えなければいけない」と生徒に感じさせてしまう場合があり、そうなってしまうと、その時間に生徒が考えたことを否定することになりかねない。

【道徳の指導と評価の一体化に向けて】

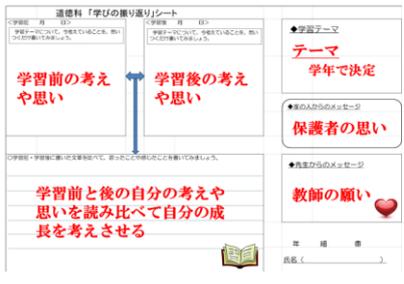
- ・ 道徳の評価の一つである通知表の所見については、年間を通して一つ書けるように準備をしていくこと。前期で一つ、後期で一つ、生徒の変容を見て、所見として書けるものを見つければよい。所見については学習指導要領において大きくくりで書くようになってきているが、大きくくりで書いた後に、細かい資料や、一時間の様子を捉えた記述をすることは問題ない。ただし、最初から「〇〇の授業では」という書き方になると断片的な内容で生徒を評価することになるので好ましくない。
- ・ 1時間の授業の中で生徒が変容することを求めてはいけない。変容できるように努力はするが、それほど簡単に道徳性は高まるものではないし、教師側が見とれるものでもない。1時間の授業で大切なことは、道徳的な問題を「深く考える」ことができたかであり、それを評価していくことが大切である。

② 授業をもとにした研究協議 2 (8月1日 講師 山田貞二 先生 岐阜聖徳学園大学教授)

本研修においては、研究主題でもある「指導と評価の一体化」についての研修を中心として行った。まず、前提として「評価の観点」「評価の視点」と「多面的」「多角的」という言葉である。これらは道徳の評価においてよく使われる言葉であるが、間違った捉え方をしていると正しい評価や指導につながらないものである。

これらのことを踏まえて、具体的な評価の手順の概要は以下のようになる。

<p>◆評価の基本的な考え方</p> <p>(1) 児童生徒の人格そのものに働きかけ、道徳性を養うことを目標とする道徳科の評価としては、育むべき資質・能力を観点別に分節し、学習状況を分析的に捉えることは妥当ではないこと。</p> <p>↓</p> <p>観点別評価はしない</p> <p>(2) 学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、児童生徒が学習の見通しをもって振り返る場面を適切に設定しつつ見取ることが求められること。☑️ 振り返りの場の設定</p>	<p>(1) まずは道徳の評価の基本的な考え方である。ここでは、7月に行った研修と同じく、一つの単元で評価するのではなく、ある程度のとまりで評価することが重要である。しかし、教科書の順番通りに授業を行い、いくつかの単元を扱ったところで評価するというのは難しい。それは評価の観点に一貫性をもたせることが難しいからである。そのため、同一観点の単元を連続で行ったり、テーマを決めて単元を並べ替えて行ったりすると観点が絞られることになると学んだ。</p>
<p>◆パッケージ型ユニットという考え方 (小単元構想道徳)</p> <p>「おおくり」という考えを一年間という大きな枠で見て、3.5時間を全て網羅した評価を記述することは…、どうですか?</p> <p>↓</p> <p>・パッケージ型ユニット (福学院大学・田沼教授) 現実的 ・小単元構想</p> <p>↓</p> <p>A 同一内容項目を複数時間ユニット ①生命尊重「6歳のおよめさん」→②生命尊重「ハムスターのあかちゃん」</p> <p>B テーマに沿った異なる内容項目複数時間ユニット テーマ:相手のことを考えて ①友情・信頼→②家族愛→③思いやり→④友情・信頼→⑤集団生活の充実</p> <p>C 観点に沿った異なる内容項目複数時間ユニット 観点: A (主として自分に関わること) ①誠実→②節度・節制→③勇気→④自立・自律→⑤真理の探究</p> <p>D 学校行事に関連した異なる内容項目複数時間ユニット ①向上心→②集団生活の充実→(体育祭)→③思いやり→④生きる喜び</p>	<p>(2) 上記の内容を詳しくしたものが左の図のようなものである。ここでは「パッケージ型ユニット」という名称を用いる。テーマに沿った単元構成を作ることによって、評価をし易くする。実際にこのような取組を行うために、リーダーとなる教師を設定し、そのリーダーをもとに学年職員が連携をとって授業を行っている。</p>

<p>◆一枚ポートフォリオ評価 (OPP)</p>  <p>学習前の考えや思い</p> <p>学習後の考えや思い</p> <p>学習前と後の自分の考えや思いを読み比べて自分の成長を考えさせる</p> <p>学習テーマ 学年で決定</p> <p>家族からのメッセージ 保護者の思い</p> <p>先生からのメッセージ 教師の願い</p>	<p>(3) 次に、具体的な評価の方法である。左の図は「一枚ポートフォリオ」というものである。これは一時間の授業の中で、生徒が自分の考えの変容を実感しやすいようにまとめるものである。学習前の自分の考えと、学習後の自分の考えを比較し易くしている。ただし、ここで注意しなければいけないのは「変容がなければいけない」という前提で生徒に提示するのではなく、最初と最後に自分の考えを比較したとき「変わらなかった」ということも許容する姿勢が大切である。</p>
<p>◆アンケートを活用して</p>  <p>児童生徒が進んだ作品のワークシートを考察し、「成長」を読み取っていく。</p> <p>単発的時間の記述とならないよう十分留意する必要がある。</p> <p>パッケージを組んでいるとより効果的となる。</p> <p>記述に中の具体例として活用・成長を見る</p>	<p>(4) 次に示されたのが左のパッケージ化された単元における評価シートである。生徒による自己評価という形式である。ここでは、生徒にパッケージ化された単元の中で、どの単元が自分の印象に残ったのかを自己評価させる。これは「印象に残った＝自分の中の変化を感じた単元」と捉える。また、その理由を記述させることにより、生徒がその単元において何を感じたのかを具体的に教師が把握する。</p>
<p>(1) 道徳科の評価文の構成 (基本スタイル)</p> <p>★内容項目の大きさ どのような学習を行ったのか。</p> <p>★前半 道徳科の授業でどのような学習活動の様子が見られたか。(学習状況の様子)</p> <p>★後半 発言、記述、パフォーマンス等、顕著な姿が見られた教材の学習でどのような思いや考えを持てたか(深められたか)。(成長の様子)</p> <p>★具体例(オプションで)</p>	<p>(5) 次に具体的に評価文を構成していく。</p> <p>前半は、授業でどのような学習活動の様子が見られたのかを記述する。後半はどのような思いや考えをもつに至ったのか、その変容を記述する。ここで注意するのは前述したように単元を絞らず、大きくくりでの評価とするというのである。</p> <p>最後に、生徒や、保護者により分かり易くするため、具体的な単元での内容を記述する。</p>
<p>◆文例を吟味してみましょう!</p> <p>(1) 話し合い活動では、友達と多様な意見を聞きながら聞き、思いやりは相手の立場を考えて行うことが大切だと記述するまでになりました。</p> <p>(2) 教材の中の登場人物の葛藤を自分のことのように捉え、その状況下ではどのように判断するのがよいことなのかを根拠に基づいて積極的に討論していました。</p> <p>(3) 親切に関わる学習では、主人公のおおかみと同じような動作を通して、親切にする気持ちのよさを感じ、身近にいる人たちに親切にするようになりました。</p>	<p>(6) さらに評価文の実例が左のようなものである。評価文として適切なものは上段のものだけである。上段のものは大きくくりでの評価がされており、どのような変容があったのかも記述されている。中段のものについては、活動の様子は書かれているが、変容が書かれていない。下段のものについては、変容が書かれているように見えるが、単元が絞られていること、道徳的価値ではなく人間性の評価になっているため不適切である。</p>

本研修を通して、「指導と評価の一体化」の道筋を理解することができたと感じる。指導と評価を一体化させるためには、まず教師の力量向上が不可欠である。この力量向上には、授業力ももちろん含まれるが、それとともに、教師が生徒を見て評価する力、そして、教師が自分の授業を評価する力も含まれる。一時間の授業の中で生徒にどのような変容があったのかを、授業中の様子や授業プリントから読み取り、それをもとに教師は本時の授業の内容と次からの授業の内容を検討する。これを繰り返しながら、大きくくりの単元でも同じことを行い、さらには学期・年間・3年間を通して行っていくことが「指導と評価の一体化」につながっていくと考える。

③ 授業をもとにした研究協議3 (11月7日 講師 中村浩二先生 授業アドバイザー)

本研修においては、2年生の授業をもとに「発問はどうあるべきか」について研修を行った。公開し

た授業においても、発問があまりよくなかったため、生徒が十分に道徳的心情や判断力を高めることができたか疑問が残る結果となった。

公開した授業は「きまりをしっかり守ってきた主人公」が様々な要因により、「きまりなんか破ってしまえ」という感情をいただき、下校途中に買い食いしようとする。しかし、そこに現れた自分の弟に諭され、きまりを破らずに済むというものである。この授業において教師側は、きまりを他律的に守るのではなく、自律的に守ることの大切さや意識を生徒にもたせたいと考えた。そこで主発問を「もし買い食いをした後に弟に会っていたら主人公は何を感じるか」とした。これにより、生徒から「後悔する」「取り返しがつかない」「一度破ってしまった事実は消せない」などの意見が出ると予想し、これらの意見から、「きまりは誰かのためだけにあるのではなく、自分を守るためのものでもある」ということに気付かせたいと考えた。しかし、生徒から実際に出された意見は「弟にも分けてあげる」「弟にあやまる」など、本質からずれた内容のものとなってしまった。

このような結果から講師の先生に「発問はどうあるべきか」についてご指導をいただいた。道徳における発問は次の三段階である。

- ① 主発問・・・授業の中心となる発問
- ② 補助発問・・・生徒の考えを揺さぶり、考えを深める発問
- ③ 一般化発問・・・資料から離れ、実生活の中に置き換えさせる発問

②・③については必ず必要という訳ではなく、必要に応じて行っていくものである。そして、最も重要となる主発問をいかにして考えるかが大切となってくる。

まずは、「資料から離れてはいけない」ということである。今回の授業においては、この点に注意する必要がある。この授業における「もしアイスクリームを買った後に弟に出会ったら」という発問は、本文の中にはそのような記述は一切ない、「仮に」という形で話を作っただけの上での主発問であった。これにより、生徒の意識は資料から離れてしまい、また、自分ごととして捉えることも困難となった。資料から離れた発問をするのは主発問ではなく、補助発問あるいは一般化発問で行うべきであるのご指導いただいた。

次に、「一般常識を問うような発問にしない」ということである。主発問はその授業の根幹を担うものである。一般常識を問うような発問をすると、生徒は答え易いかもしれないが、考えが深まること、広がることはない。また、このような発問だと、話し合う必要もなくなってしまう。

最後に、「主発問に対する自分の考えを全員にもたせようとしない」ということである。どうしても我々は、「自分の考えをもった上で、人の考えを聞くことで、自分の考えが変容する」と思いがちである。しかし、道徳的価値というのは、生徒によってスタートラインが違う。例えば、今回の授業における「きまり」についても、スタートの段階で「破ってもいい」と考えている生徒もいれば「自律的に守るべきもの」と考えている生徒もいる。中には「そんなこと考えたこともない」という生徒もいるであろう。その中で自分の考えがもてない生徒がいるのは仕方のないことである。このような生徒が自分の考えをもつまで時間をとり続けるのではなく、積極的に話し合いへと移行していくべきである。自分の考えがもてなかった生徒が、友達の意見を聞いて「なるほど」と思うことができれば、それで道徳的価値の理解が始まったと言えるのである。

本研修を通して、道徳の授業において最も大切な「主発問の考え方」を改めて理解することができた。それとともに改めて教材研究の大切さを感じることができた。

5 成果と課題

(1) 成果

まず、成果として挙げられるのは、教師の力量向上、特に「発問」についてである。これまで主発問が大切であるということは十分理解していたが、それをどのように考えるのかがはっきりしていなかった。そのため、資料から離れた発問があったり、生徒の思考が深まらない発問があったりした。しかし、今回の取組を通して、道徳における発問の構成と主発問の考え方を理解することができた。これにより、多くの道徳の授業において、生徒が自分ごととして問題意識をもって取り組むことができるようになった。また、主発問以外にも「補助発問」「一般化発問」を取り入れ、生徒の考えを揺さぶることにより、一時間の授業の中で「友達の考えを聞きたい」と思う場面をより多く設定することができるようになった。そのため、生徒が自然と自他の意見を比較し、道徳性の高まりや成長実感を得ることができるようになった。

また、発問に着目することは、指導と評価の一体化にもつながった。一時間の授業の中で、自ら深く考え、友達の意見を聞く中で、考えが変容する生徒が増えた。先の中村先生の研修会でもあったように、一時間の授業の中で必ず生徒の考えに変容がなければいけないという訳ではない。もちろん、授業の最初と最後で考えが変わらない生徒もいる。しかし、生徒にとっては、授業の中で自分の考えが変わる場面というのは、自分の変化・成長を実感する一番のポイントと言える。このような場面が増えたことは、生徒が自分を肯定的に評価する場面を増やすことができたと言える。

さらには、この「考えに変容があった生徒がどれだけいたか」というのは、道徳の授業の核である「発問」が適切であったかにつながる。これは教師が自分の授業を評価する上での一つの指針となり、毎時間このことを検証することで、指導と評価の一体化につなげることができるようになった。

もう一つの成果は具体的な文章による評価についてである。道徳が教科化されて間もないため、評価については試行錯誤しながらの状態であった。これまでの道徳の評価は、授業プリントを蓄積し、その中から生徒の変容が見られるものを使って評価するという形をとっていた。また、通知表の所見については、できるだけ生徒や、保護者の方に分かり易いように、資料名や生徒の発言内容、ワークシートの記述、挙手の様子、つぶやき等を具体的に記述していることがあった。しかし、今回の研修を通して道徳の評価は長期的な視点で行うこと。生徒を評価するだけではなく、教師自身が自分の授業の内容も評価すること。変容は記述するが、具体的な資料名の記述はしないなど、これまで意識していなかったことを教師間で共通理解することができた。

最後に、他教科・他領域との関連である。道徳性は、週に1時間の道徳の授業だけでなく、学校での活動全てにおいて養っていくものである。しかし、これまで、実際にどのように他教科・他領域と関連させればいいのかは曖昧であった。しかし、中村浩二先生の研修を通して、少しの工夫でよいとご指導いただいた。例えば、生徒が発言する時に前を向いて発言する場面がある。これは教師と生徒との対話になるだけで、生徒同士の対話にはならない。いくら教師が生徒の発言を認めるような言動をとったとしても、発言した生徒にとっては「先生一人が認めてくれた」と感じるだけである。

そこで、同じ場面で友達の方を向いて発言させるようにする。これにより、話す生徒は多くの人に自分の考えを分かってもらおうという気持ちで話す。また、聞く生徒は友達が伝えようとしていることに対して傾聴し、頷き等の動作を伴いながら聞くようになる。これにより「みんなが認めてくれた」と感じるのである。教師一人の受容に比べ、より大きな自己肯定感を得ることができるのであ

る。道徳と他教科・他領域の関連は、このような少しの工夫で可能なため、現在多くの教科で取り入れている。

また、教科の内容と道徳を関連させた授業も行った。扱った教材は「大人になれなかった弟たちに（中学1年 国語 光村図書）」である。太平洋戦争の中、幼い三人の子供を育てる母親は、上の二人の子供に食事を与えるため、自分はほとんど食事を摂らなかった。そのため母乳が出なくなり、一番下の子供が栄養失調で亡くなってしまうという内容である。この教材で「自分が母親だったら食事を摂るか摂らないか」を中心発問として授業を行った。まず、この授業を行うことができたのは、中村浩二先生の「発問」に関する研修があったからである。「主発問の考え方」を理解していたからこそ、多くの考えが生まれる場面、自分のもつ道徳的価値観を生徒同士が交流したいと思う場面を国語の教材の中に見いだすことができたのである。また、この発問に対する考えは多岐にわたるため国語の授業では扱わなかったが、話し合いに多くの時間をかけ、一人一人に深く考えさせることができた。このように少しの工夫で教科横断的な道徳指導も進めることができた。

(2) 今後の課題

一つ目に課題として挙げられるのは、地域との連携をどのように図っていくかである。学習指導要領では、道徳性を「人間として他者とよりよく生きるための基盤」としている。また、「学校における道徳教育は、生徒一人一人が将来に対する夢や希望、自らの人生や未来を拓いていく力を育む源となるものでなければならない」とも記述されている。つまり、生徒が将来に対する夢や希望、生きる力を育むためには、他者と共によりよく生きようとする自己を肯定的に受け止めると共に、他者との関わりや集団・社会の中で自身のよさや課題、可能性に気付きながら、伸ばしたい自己について深く見つめることができるような学習評価を行うことが必要である。しかし、この道徳性を養うことを学校内の取組だけで迫るのは難しい。そこで必要となるのが地域、保護者との連携だが、新型コロナウイルス感染症の状況が今後どうなるかは極めて不透明な状況と言える。その中で、「感染症が落ち着いたら」という仮定のもとに考えていたのでは、何もできないまま中学校生活を終えてしまう生徒が出てくることも予想される。実際に、現在の3年生は対外的な行事はもちろん、地域、保護者の方に学校に来ていただく行事のほとんどを経験することなく中学校生活を終えようとしている。ICT機器の充実や、一人一台端末の整備により、オンラインでの講演等をできる範囲で行ったが、新型コロナウイルス感染症が流行する前と比べると対外的な行事は激減したといえる。そのため、カリキュラムマネジメントを進め、コロナ禍であっても、地域、保護者の方との連携を図り、学校と地域が一体となって生徒に協同的な学びの場を設定していくことが必要であると感じた。

二つ目の課題は、校内の体制をどのように整えていくかである。今回の取組を通して教師の力量・知識は向上したといえるが、体制を整えないまま、得たものを全て実行しようとするれば、一人一人の教師にかかる負担は非常に大きくなる。そのような状況を生まないためにも、学校体制の整備は必須である。道徳推進教師だけでなく、それをサポートする教師も各学年から最低一名は必要となってくる。このように学校全体として道徳教育に取り組める体制を年度当初から整備する必要がある。